


早稲田大学大学院日本語教育研究科


2016年7月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：留学生エンrollment・マネジメントと日本語教育
—小規模大学の取組みを通して—

申請者氏名：春口 淳一

主査 川上 郁雄 署名 川上 郁雄 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 佐久間 まゆみ 署名 佐久間 まゆみ 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 戸田 貴子 署名 戸田 貴子 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

＜本論文の概要＞

本論文は、地方小規模大学の留学生政策の変遷の事例をもとに、留学生のエンロールメント・マネジメント（以下、EM）と日本語教育の関係について考察した研究である。本文が519ページ、参考文献が16ページ、＜資料編＞が156ページの大部な研究である。

第1章「大学における留学生獲得の意義」では1980年代の「留学生10万人計画」から近年の「留学生30万人計画」の推移を背景として日本の大学における留学生獲得の意義と課題を指摘し、問題意識を説明し、第2章「日本語教育と留学生エンロールメント・マネジメント」では先行研究を踏まえ、EMの構成要素である「マーケット・リサーチ」「リクルート」「アドミッション」「経済支援」「教学支援」「学生生活支援」「リテンション」「卒業」の視点からの分析枠組みを提示した。

続く第3章「対象大学の沿革と基本情報」、第4章「国際交流・留学生施策史」、第5章「留学生マーケットと留学生獲得」では、調査対象とした地方のA大学の概要とその大学で展開された国際交流および留学生施策の歴史と留学生の獲得の実態を分析した。その中で、学生の定員割れから留学生を積極的に受け入れるようになった経緯、日本人学生の留学先確保の事情、東日本大震災等の影響による留学生の減少、中国各地からの留学生の確保などが説明され、EMへのさまざまな影響素因を明らかにした。

そのうえで、第6章「正規留学生支援とその課題」では、中国におけるブローカーによる留学斡旋の課題、韓国における日本語学校との連携や二重学位プログラム等に見られる課題や成功例が議論された。第7章「短期留学生支援とその課題」では、正規学生ではない短期プログラムの学生の受入れ上の利点と課題が明らかになった。さらに第8章「日本語特別プログラム」では、正規学生の受入れである「日本語特別プログラム」の変遷が述べられ、多くの退学者が出たことによりこのプログラムは失敗であったという。以上、大学として留学生を受け入れる場合の課題が詳細に論じられ、教職員への負荷や未解決の課題が指摘された。

このような私立の地方小規模大学における留学生のEMに関する実状を踏まえて、日本語教育あるいは日本語教師は何をしなければならないのかが、第9章以降で議論される。第9章「アーティキュレーションの実践としての日本語教育」では、「教学支援」中心の留学生EMに必要なのは、グローバル・アーティキュレーションと市民リテラシー型アーティキュレーションであることが主張される。このふたつのアーティ

キュレーションにおいて、日本語科目としての「古典日本語文法」がグローバル・アーティキュレーションとしての実践例、また「キャリア日本語」という科目が卒業後の就職や進学の支援となる市民リテラシー型アーティキュレーションとしての実践例として挙げられた。キャリア支援課と留学生の接点を生み出し、大学教職員にとっての市民リテラシーの育成に、日本語教育の果たす役割が示された。

第10章「日本語教員養成課程」を軸としたアーティキュレーション」では副専攻である日本語教員養成課程の学生や修了生が果たす役割が論じられた。修了生が日本語教師として中国の協定校へ赴任することや、日本語教育の「海外インターンシップ」制度の実施も、大学間のアーティキュレーションとして意義がある点が強調された。

以上の10章にわたる留学生EMの実態分析と課題の検討を踏まえて、最後の第11章「総合的考察」では、理想的な留学生EMモデルが提示され、日本語教育中心のアーティキュレーションが改めて議論された。海外の大学とのグローバル・アーティキュレーション、また日本の大学内における大学教職員リテラシー型アーティキュレーションを含むEM理論が新たな規範として提示された。

<本論文の評価>

1. これまで「留学生10万人計画」「留学生30万人計画」など留学生を日本の大学へ呼び込み、国際化を推進する政策が政府から発信され、それに応じて各大学は留学生を大量に受け入れてきたが、そのような留学生増加政策が大学、特に地方の小規模大学に及ぼす影響については必ずしも明確にされていなかった。本論文は、留学生に対する教学支援の中で日本語教育が中枢に位置するという視点から、大学における留学生EMの課題に取り組んでおり、オリジナリティある研究として高く評価できる。

2. 大学における留学生EMの課題を研究するために、本論文は地方小規模大学を事例として取り上げ、その大学運営、留学生のリクルートからキャリア支援までを、長期にわたる内部資料および情報の収集をもとに具体的かつ総合的に論じており、その独自の研究方法と分析結果は評価できる。

3. 本論文では留学生EMの課題を論じる際に、日本の大学の大学運営に立った視点からだけではなく、海外の大学との連携、つまりグローバル・アーティキュレーションの視点に立って議論を行っている点、さらに、留学生教育を実質化するために日本の大学内における連携、つまり大学教職員リテラシー型アーティキュレーションとい

う言語教育の視点を含むEM理論を提示している点は、小規模大学のみならず、中・大規模大学においても共通性があり、示唆を得ることができることも評価できる。

4. そのような問題意識から、さまざまな制限のある地方小規模大学において、著者自身による日本語教育の実践例を示した点も独創的で挑戦的な試みとして評価できる。

ただし、以下の課題もある。

1. 申請者は、「留学生の質とは、そもそも何を指すのか」という問題提起をしており、これが本論文の小規模大学に関する事例研究の批判的検討の基調をなしている。その視点からの分析として「留学生 10 万人計画」についての記述はあるが、「留学生 30 万人計画」に関するA大学の計画については、やや客観性を欠き、定員補充の留学生施策の試行錯誤が留学生の質の保証を達成したのか否かに関しては言及がない。

2. 本論文の第 9 章の「アーティキュレーションの実践としての日本語教育」では、「教学支援」を重視する留学生獲得の一環として、申請者自身が実践した「古典日本語文法」と「キャリア日本語」という二つの日本語科目の授業報告をしている。「古典日本語文法」は中国の留学派遣元大学の要請による「グローバル・アーティキュレーション」の日本語教師の貢献の例として詳述されており、A大学では多数の留学生が受講する科目として評価されるという。しかし、客観的に見ると、この科目は、中国の協定校からの要望を受けて開講されたものであり、消極的な企画だといえよう。

3. 本論文のキーコンセプトである「市民リテラシー型アーティキュレーション」として「キャリア日本語」の実践例が紹介されているが、そのシラバスの内容はビジネス日本語の授業のような印象を受ける。シラバスからは、「ビジネス日本語」を「キャリア日本語」にラベルを貼り換えただけのように感じられる。「市民リテラシー型」という看板を掲げている以上、差別化が求められよう。さらに言えば、「市民リテラシー型アーティキュレーション」としての「キャリア日本語」という議論は、結局誰の視点から展開されているのか、曖昧である。学生の視点から見れば、「キャリア日本語」は、学生と職員間だけではなく、むしろ留学の先にある就職後のことを考えると、職場、さらには社会における就労活動に拡大されるのではないだろうか。

4. 第 10 章の『『日本語教員養成課程』を軸としたアーティキュレーション』でも、協定校との関係性の向上を図る取り組みで、副専攻の日本語教員養成課程を設け、講座修了生が中国の協定校に赴任して、両大学の懸け橋として活躍したというが、ここでも、地方小規模大学における日本語教師養成の質が問われるところではないかとい

う懸念がある。講座担当教員の資質や教育実習等のカリキュラムの拡充が不十分だと、教師養成の成果も上がらない恐れがあるのではないか。

5. 申請者は第 11 章の「総合的考察」でネウストプニー（1997）の言語管理理論を踏まえて「留学生 EM の理論の 5 つの特徴」と提示し、留学生 EM の理論化を試みている。これは大学全体として取り組むための留学生 EM の理論化であり、極めて重要だが、この理論化と申請者がいう「日本語教育中心のアーティキュレーションの確立」との理論的連関がやや弱い。

<本論文の判定>

以上、今後の課題も残されているが、本博士学位申請論文は、日本語教育学の博士号に値するものとして評価できる。

なお、本論文にあった誤記は、添付の「日本語教育研究科 博士学位申請論文修正リスト」のとおり修正されたことを確認した。

日本語教育研究科 博士学位申請論文修正リスト

博士学位申請論文 題目	留学生エンロールメント・マネジメントと日本語教育 —小規模大学の取組みを通して—	
申請者	春口 淳一	
修正リスト提出日	2016年8月29日	
ページ番号・行	修正前	修正後
P415 表中2行目	表9-27「キャリア日本語Ⅰ」 シラバス 「科目名」が「応用日本語Ⅲ (古典日本語文法)」になって いる。	「科目名」を「キャリア日本語 Ⅰ」に改めた。